



IRP's Build Back Better 事例(2015年5月、日本)

口永良部島の火山活動に伴う住民の避難行動

2015年6月11日

☆火山の活動状況・口永良部島の状況☆

2015年5月29日9時59分に口永良部島の新岳(鹿児島県屋久島町)では、爆発的噴火が発生しました。気象庁は同日10時7分、噴火警報レベルを3(入山規制)から5(避難)へ引き上げました。この噴火により、噴煙が火口上9,000m以上まで上がり、火口周辺に噴石が飛散しました。また、火砕流が発生し、新岳火口の南西側から北西側(向江浜地区)方向の海岸まで達しました。屋久島町は、同日10時15分、口永良部全島に対し、島外への避難勧告、同日10時20分には避難指示へ切り替えました。全島民の無事を確認し、噴火時、島に滞在していた137名(島民118名、旅行者等19名)は町営フェリー、鹿児島県防災ヘリ、海上保安庁巡視船、漁船にて全員避難しました。2015年6月10日現在、白色の噴煙が火口縁上300mまで上がっているのが確認され、引き続き大きな噴石の飛散および火砕流の流下が切迫している居住地域では、厳重な警戒(避難等の対応)が必要であり、降雨時には土石流の可能性もあるため注意が必要となっています。

☆IRP's Build Back Better ポイント～事前の備えが死者ゼロに～☆

島にいた137人のうち約120人がまず避難したのが、島西部の高台にある番屋ヶ峰(旧NTT局舎)の避難小屋です。屋久島町は2014年8月に口永良部島の新岳で34年ぶりに噴火が発生したことを受けて火砕流が到達しにくい標高が高い場所に一時避難場所を変えるなど避難の方法を変更・改善して、鹿児島県は、こうした対応によって島民全員が速やかに避難できたとみています。口永良部島の新岳で2014年8月に起きた噴火では大きな噴石が飛んだほか、低温の火砕流が-発生した痕跡が確認され、屋久島町は噴火への備えを見直しました。まず、新岳の火口から2キロ程度の範囲と、これまでの噴火で火砕流が流れたことが多い島の南西側の一部には立ち入らないこととしました。また、住民の一時避難場所についても、当初は、島の中心部にある本村港に避難することにしていたのですが、火口から北西に4キロ余り離れ、噴石や火砕流などの危険が比較的少ない「番屋ヶ峰」と呼ばれる高台に変更しました。そのうえで番屋ヶ峰にあった通信施設の建物を改装し、島民全員の数日分の食料や水を備蓄するなど準備を進め、2014年11月には住民たちが実際に番屋ヶ峰まで避難する経路を確認する訓練を事前に行っていました。



☆参照☆

屋久島町「口永良部島【新岳】噴火に伴う経過について」

<http://www.town.yakushima.kagoshima.jp/info-prevention/4730/>

鹿児島県「5月29日口永良部島火山噴火の被害状況等」

http://www.pref.kagoshima.jp/aj01/documents/45732_20150529155231-1.pdf

<http://www.47news.jp/smp/47topics/e/265751.php>